
Beyond the Extreme

harry

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Beyond the Extreme

【Nコード】

N5350H

【作者名】

harry

【あらすじ】

平凡に暮らしていた少年ジャックは父親による化学実験の試験体となる。目を覚ますとそこは中世の世界だった。さらにジャックは大鷲によって城へと連れ去られ、城の中にいた男に王にならないかと依頼される

第 1 話

〔 Beyond the Extreme 〕

ひとつの人影が礼拝堂らしきものの前に立ち祈りをささげている
よう

2

に見える。その人影は赤い髪に黒いズボンと黒いローブを着ている。

どう見ても40、50歳ぐらいの男である。

するとそこに軽い武装をした兵士のようにみえる男が1人、その
人影に

近づいて、何かを話している。

「お告げの結果はいかがなものでしたか？」兵士が先にはなしかけた。

「たった今神のお告げを聴き申し上げました。」と応じる。どのようなものでと

兵士は問うので、こつ答えた。

「とおいとおいところから

ひとりのわかものがやってくる

そのものをくにのちよつてんとすれば

みちはひらけるであらう」「

1人の少年が大人たちに体を拘束され、もがいている。

やめろ、やめると必死で泣き叫び、抵抗するも、大人の力にはかなわ

ない。茶髪と白い上着に黒いTシャツ、童顔とひ弱な体格からして、14、15歳だろう。

けなげな少年が、まさに人体実験の生贄となるのだ。

「離せよ!どういふことなんだよ!」

「すまないね。われわれ生物の技術革新がかかっているのだよ。

ジャック君。」

「だからって実の息子をこんな目に……!」

親父！・・・何とかいえ！」ジャックの父親は科学者だった。

「・・・・・・・・実行しろ。」

「！！！」

生贄の時が来た。ジャックは機械装置の内部に詰め込まれ、父親が作

動スイッチを押した。なんと皮肉なことであろうか。機械は「ごうごう」と

うなりをあげて、うなりをあげて、ゆれ始めた。

「お願いだ・・・・・・・・！あけてくれ・・・・・・・・！俺は・・・・・・・・まだ・・・・・・・・

死にたくないんだ・・・！誰か・・・！

親父・・・・・・・・・・！！これが最後の言葉だった。

機械が一瞬光だした。そしてその後にはなにこともなかったかのよう

に機械がそこにあった。しかし中をあけてみるとそこにジャックはいない

かった。

実験は成功したのか、失敗したのか。それすらわからない。

T o b e c o n t i n u e d . . .

第 2 話

目を開けても何も見えない。

見回しても何も見えない。

そうか。これが「死」なのか。

もっと生きていたかったけど・・・

寂しい

悲しい

苦しい

ならばいつそ静かに目を閉じて

}}
}}

}}}
}} Beyond
the
Extremes
}}

永遠に眠ってしまおう・・・

目を閉じてても光が差し込んできてまぶしい。そこで目を傷めないように、ゆっくりと

目を開けると、木漏れ日が目を傷つけていたとわかった。どうやら俺は天国にたどり着いた

ようだ、ジャックは思った。さても、一面は森林で、このままいると、野生の動物に襲われて、

せっかく天国に着たのに地獄へと落ちてしまう。とか、いや、この場合元の場所に帰れるのかも。とか

寂しい自分の心を紛らわせながら、ここから離れようとした。

そのとき、天からけたたましい鳥の鳴き声が聞こえたので、天を見上げたら、大鷲がこっちにむかって

急降下を始めた。ジャックは逃げようとしたが、あっけなくその足につかまれて空を舞った。しかし

ジャックは抵抗しなかった。抵抗したら落ちて地獄か元の世界だ。ジャックはどちらにも行きたくなかった。

それにしても、見える景色がまったく違う！ この世界にはいつも聳え立っていた高層ビルの群や、埋立地にある

空港や港、蛇のように長い渋滞の列がまったく見えない！、小さな町を取り囲むように、丘が見え、湖が見え、

山が見え、その山を通り越して海までもが見える！ とても気持ちがいい！

しかし、ジャックはこの先を考えるとこの爽快感もどこかへ消えてしまった。俺はこれからどこへ行くのだろうか。

このまま巢に持って帰られて、雛鳥のえさとなるのだろうか。それはいやだ。かといって、抵抗して落ちるのもいやだ。

ああ、俺はどうすればいいのだろう

しばらくすると、丘が近くに見えてきて、その頂に大きな城がみえる。そのとき大鷲はその中庭に吸い込まれるように

急降下を始めた。猛烈な空気抵抗による痛みにジャックは引きちぎ

れるかと思った。中庭に着陸しそうなときに、大鷲は

足の指を開いた。ジャックに外傷はなかった。しかし急降下による痛みはかなりのものだと思われる。

「いてえ……何の因果でこんな目に！」ジャックは怒りをあらわにした。

すると、赤い髪の男が、門をあけて、ジャックへと近づいて、こう言った。

「始めまして……ジャック様！」

第 3 話

大鷲にさらわれて

城の中庭で謎の男に出会って

小さな部屋につれてこられて

一体何が起こるのだらう

~~~~~  
B  
e  
y  
o  
n  
d  
  
t  
h  
e  
  
E  
x  
t  
r  
e  
m  
e  
~~~~~

ろくでもないことだらけがな・・・

質問したいことがたくさんあるが、ありすぎて言葉にできない。
そこで、

「あなたは誰なのか」「ここは何処なのか」「なぜあなたが俺の名
前を知っているのか」に

質問を絞って、発言することにしたが、それでもうまく言葉にでき
ず、ジャックはちゃんと

理解できたか不安だった。

「わかりました、まずはその質問に答えましょう。」と男は言った。通じたようだ。

「私の名前はフェレス。この『ワイト王国』の参謀を勤めさせていただいています。」

「ワイト王国」・・・学校の授業で習ったな・・・たしか1000年前の王国・・・

1000年前!?!つまりここは1000年前の世界ということか!?!

要は、俺はあの機械で「タイムスリップ」をしたことになる！

そんなバカな！だが、これで1つ謎が解けた！

ジャックは難しい数学の問題を完答したような、うれしい気持ちになって最後の質問の

答えに臨んだ、しかし、そのうれしい気持ちはフェレスへの疑念へと変わる。

「私があなたの名前を知ったのは・・・才能といいましょうか。私には『予知能力』があるのです。」

中庭の礼拝堂で瞑想をしていると、お告げというか、声が聞こえてくるのです。昨日はあなたの存在、

今日はあなたの名前が聞こえてきました。」

予知能力？何を言っているんだ？人間の未来なんて決まってい
るはずがない！

「未来」は作り出すもの
じていた。

ジャックはそういった思想を信

それでも、実際そういった方法で自分の名前を知ったのは事実なので、ほかに質問はあるか、と

聞かれた時も、ありません、と答えた。自分と反する思想にはあまり触れたくなかったし、これ以上

質問してフェレスを困らせるのも好ましくないと考えたからだ。

するとフェレスの赤い目が少し黒ずんで、顔が険しくなり、

「では、ジャック様にお問い合わせがございます。」と言った。そして

「ジャック様にこの国の支配者、すなわち『国王』となっていていただきたいのです。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5350h/>

Beyond the Extreme

2010年10月16日04時25分発行